とろ蜜シャッターチャンス

女教師&制服少女と秘密の撮影会

庵乃音人
挿絵／ジェントル佐々木

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　ロリッ娘美少女、運命の再会……4
第二章　初めての、いけない口奉仕……31
第三章　競泳水着の美少女……91
第四章　深夜の個人撮影会……136
第五章　先生と内緒でお風呂…175
第六章　一夜限りの撮影ハーレム……247
エピローグ　人生最高の大晦日……284

登場人物 *Characters*

加藤 文哉
(かとう ふみや)

写真部に所属する少年。顧問である菜々子に淡い想いを抱いている。

綾瀬 菜々子
(あやせ ななこ)

写真部の顧問教師。優しく凛々しい才媛で学園内の人気は高い。やや童顔気味の美貌と、色白の美肌と巨乳、巨尻の持ち主。

草壁 あやね
(くさかべ あやね)

学園のアイドル的美少女。水泳部のエース。端正な美貌と母性愛に富んだ優しい気性の持ち主。文哉と同じ中学校出身。

折原 美緒
(おりはら みお)

初心な美少女転校生。幼さが残る愛らしい容姿の持ち主。料理部に所属。ある理由から文哉を慕う。

「み、美緒ちゃん⁉」
「ほんとはあの日、先輩にもらってほしかった……せめて、そんな素敵な思い出だけでももらえたら、私、一人でも生きていけるって……せ、先輩……お願い、もらってください……わ、わ、私……だめですか？　全然……興奮できませんか――」
「あぁぁ、美緒ちゃんっ！」
気づいたときには、美緒の身体に飛びついていた。
「――――きゃあっ⁉　ふ、文哉先輩っ……」
美緒は文哉の勢いをまともに食らい、背後のテーブルに尻を押しつけてバランスを取った。文哉はさながら、聖母にひざまずいて、慈悲と許しを乞う信者のよう。美緒の前に膝立ちになり、剥き出しの下半身を掻き抱く。
「あぁん、先輩……」
手をお尻に回した。温かな尻たぶを鷲掴みにすると、柔らかくぷにゅっとひしゃげる。すべすべした練り絹みたいな感触である。
「もうだめ、美緒ちゃん。可愛すぎる！　こんなことされちゃったら、俺もう我慢できないッ……あぁぁ」
「ふわっ。ああん、せん、ぱいぃ……」

グニグニと尻肉を揉んでぬくみと触感、ボリューム感を堪能しつつ、ふっくらと盛り上がる恥丘に頬を擦りつける。

少女のもっとも秘めやかな部分からは、甘酸っぱい南国果実のような香りがした。

「はふう、んんっ、先輩。あぁ、恥ずかしい。私ったら……」

「わ、分かってる、美緒ちゃんの可愛い気持ちは。ごめんね、恥ずかしいことさせて。お、俺なんかでほんとにいいの？　うぅ……」

ひとしきり尻を揉み終えて満足した文哉はプリプリとくねる臀部を拘束し、丸出しの局部をしげしげと見る。

「あぁん、い、いやあぁ……」

「ほんとに毛が生えてない。剃ってるわけじゃないんだね」

無毛の土手をうっとりと眺めて、つい嘆声を零す。知らず知らず、股のつけ根を見つめる瞳に感動と愛おしさ、淫らな欲望が滲み出してしまう。

（あぁぁ、たまんないっ！）

文哉はそろそろと、パイパン恥裂の周囲をなぞった。

「ああん、先輩、恥ずかしいよう。は、生えてこないの。待ってるのに。早く生えてって、ずっとお祈りしてるのに……高校生なのに生えてこないのぉ。ひうぅ……」

優しくなぞられて刺激が走るのか。マシュマロみたいにプニプニした恥丘やふともに、ゾクリと大粒の鳥肌が立つ。
「あぁ、美緒ちゃん……可愛い……何て可愛いんだ……くうぅ!?」
熱いため息を零しながら、なおも文哉は無毛のロリータ局部に見入る。
幼子を思わせる、初々しい女陰。ふっくらして色素沈着も薄い恥丘に、縦一条の亀裂が走っているだけというのがたまらない。とはいえ今は――、
（おおぉ。美緒ちゃん、興奮してくれてるんだ……）
本来ならピッチリと扉を閉じ、二枚の花ビラも大人しく重なりあっているところだろう。しかし乳首が勃起していることからも想像できた通り、あどけない少女の美体は淫らに発情し始めていた。とろけかけたラビアが妖しい花を咲かせ、いやらしく開きかけている。そこから覗く小陰唇は、うっとりするほど淡く儚い桜色をしていた。蜂蜜を思わせる透明でネバネバした体液が、露出した粘膜を妖しくぬめ光らせている。
縦に刻まれた唇のような陰唇の上部に鎮座するクリトリスは、恥ずかしそうに莢（さや）の中に実を潜めていた。
「あぁ、美緒ちゃん。何て可愛いオ、オマ……」
「や、やだっ、恥ずかしいこと言わないでくだ――きゃあぁ!?」

ケダモノじみた激情が、見る見る身体の中いっぱいに充満し、文哉を突き上げる。
ほんとはこんなことしちゃだめなのに。そんな後ろめたさすら、エッチな行為をより興奮させる媚薬。少女のワレメに顔を押しつけ、駄々っ子みたいに顔を擦りつけながら、音を立てて匂いを嗅ぐ。
「すんすん。すんすん、すん……」
「や、やだやだ。匂いなんて嗅がないで下さい。嗅いじゃいやあぁぁ……！」
分かってる。こんなことされたらそりゃ恥ずかしいだろう。しかしいやがられればいやがられるほど、いっそう欲情してしまうのだ、男という難儀な生き物は。
鼻腔いっぱいに染みる甘酸っぱい媚臭は、磯の香りと酪農臭の濃密ブレンド。そこにほんのりとアンモニアの匂いも混じっているのが生々しかった。
「恥ずかしがらないで。と、とってもいい匂いが……あぁ、美緒ちゃんっ！」
ゾクゾクと鳥肌を立てて舌を突き出し、ほぐれかけた媚唇を……ねろん。
「あぁぁん、いやん。舐めちゃだめ。先輩、私恥ずかしい……」
「可愛い。とてもいい匂い。あぁ……」
ピチャピチャピチャ、ぢゅるぷ。レヂュレヂュ。ぶぢゅ……。
「やあぁん、あっあっ。ンフゥン……」

いやがる尻を抱きかかえて動きを封じ、夢中になって舌を躍らせる。
ビラビラの感触は活きのいい貝肉か、あるいは唇の裏側みたい。ぬるぬるした粘膜を蠢かせ、ヒクン、ヒクンとひくついて舌を甘締めする。
初々しい牝ビラは、舌にジンとくる甘ったるい酸味が印象的だった。しかも舐めれば舐めるほどさらに酸っぱさが強くなり、舌にとろけると今度は途端に甘さを増す。
「あっ、やん、だめ。あん、先輩、ど、どうしよう。アアァン……」
(み、美緒ちゃん。感じてきたんだ……)
「や、やばい。俺、美緒ちゃんに、どんどん恥ずかしい思いを……」
抑えきれない欲情が、文哉をいっそう淫らな獣にする。意志の力で必死に閉じているかに見える少女のふとももの間に手をすべりこませて——ガバッ。
「きゃあぁぁ!? あん、や、やだ、先輩、こんなかっこ……あぁぁぁ……」
(むおぉ、すごい……)
いきなり両脚を開かせられた美緒は腰砕けになりかけ、テーブルに手を突く。モデルのように伸びやかな脚を大胆ながに股に開き、ぐっと踏んばる様が悩ましい。
ふとももが悩ましげに揺れ、ふくらはぎにくぽっと筋肉が盛り上がる。
「あぁ、美緒ちゃん……可愛いっ!」

ふしだらな痴情が麻薬みたいに文哉を冒す。改めてデジカメを構えると、
「――ひいっ⁉　せ、先輩――」
カシャッ！　パシャッ！
（あぁ、俺ってば……美緒ちゃんのオマ〇コ撮っちゃってるっ！）
超至近距離でカメラを構えての、ありえない背徳媚肉撮影。
美緒は慌てて股を閉じ、手で股間を隠そうとするけれど、文哉は許さない。美緒の手を払いのけ、内ももに手を押しつけて強引に開かせる。
「や、やだ、恥ずかしい！　撮らないで……そんなとこ撮っちゃいやあぁぁ！」
ぶちゅ。ぶちゅぶちゅ……。
「――――あっ⁉　こ、これはっ……」
バシャバシャ！　カシャッ！
「ひいぃん⁉　い、いやいやいやあぁんっ！　撮っちゃだめえぇ、あーーーん！」
恥ずかしがり、死に物狂いで脚を閉じようとしているのに、媚肉は艶めかしく蠕動（ぜんどう）し、卑猥な汁音を立ててさらなる愛液を溢れさせる。
甘酸っぱい果実臭がむせ返るほど濃厚さを増し、霧のように鼻面を撫でる。息苦しくなるほどの野性に憑かれつつ、文哉はなおも美少女の恥部を撮りまくる。

バシャバシャ！　カシャッ！
（す、すごい。こんなとこ、写真に撮ってるなんて……）
「やだあぁ、恥ずかしいよう……うーうー、撮られちゃった……恥ずかしいとこ、撮られちゃってるよおう……」
あまりのことに、思うように力が入らなくなってきたのか。美緒は大開脚姿に綺麗な脚を曲げたまま、テーブルに体重を預けていやいやと髪を振る。
（くぅ。このがに股、たまらないっ……）
ワレメのドアップばかりでなく、今度は少し距離を取った。ふつうにしていたら一生お目にかかれないはずの、美少女のがに股ポーズを――。
パシャパシャ！　カシャッ！
「ひうぅん、い、いやあぁぁ……」
「あ、あぁ、美緒ちゃん。もうだめだっ！」
文哉はとうとう、写真なんて撮っていられなくなる。
カメラを置いて再び美緒に躍りかかると、華奢な女体をくるりと反転させた。
「ああぁん、いやあぁん……」
勢いよく回され、バランスを崩しかける美緒。慌ててテーブルに手を突いた美少女

の細い腰を掴み、グイッと後ろに引っ張る。
「きゃんっ!? あぁん、だめえぇ……」
（うおおっ、何ていう眺め……）
美緒のスカートをたくし上げた文哉は、眼前の光景にうっとりと生唾を飲んだ。つきたてのお餅か、あるいは白いアンコをたっぷり包みこんだふっくら饅頭か。しっとりした艶とピチピチした健康的な色香の両方を漂わせたお尻が、挑むように突き出される。双子の臀肉の間に濃い影を刻んで走るお尻の割れ目も愛らしい。
「あぁ、だめ。ゾクゾクするっ！」
文哉は前屈みになり、尻肉を鷲掴みにして左右にくぱっと広げた。
「ひぃぃんっ！ やん、広げないで……そんなとこ広げたら……あああんっ!?」
「おおぉ……」
尻の谷間を思いきり開かれ、美緒はせつない悲鳴を上げる。文哉はそんな美少女の抵抗を力任せに封じて、桃尻を割ったまま谷間の底の眺めに見とれた。
（おおぉ、お尻の穴も綺麗なピンク色……しかも、こっちにも――）
陰部と同様、一本の毛も生えていないつるつるした谷間であった。
放射状に伸びた皺々の中心で、肉の窄まりが喘ぐようにひくついている。

これはもう、まぎれもない新鮮な果実。文哉は息苦しさにかられながら舌を突き出し、尻の谷間に顔を押しつけて――。

ねろん、ねろねろ……ねろねろ、ねろん……。

「ふはぁん、やん、だめええぇ！　そ、そんなとこ舐めないで……汚いィン！」

たっぷりと唾液をまぶした舌の刷毛で秘肛を舐め上げれば、美緒はヒクン、ヒクンと尻を跳ね上げ、∞の字を描いてグラインドさせる。

「き、汚くなんてないよ。んっ……美緒ちゃんのお尻の穴だもん。あぁ、甘い……それに、ここもいい匂い……すんすん、すん……」

尻穴をこじりつつ、再び鼻を鳴らして尻の底の匂いを嗅ぐ。

女の子っていうのは、どうしてこうもいい匂いがするのだろうか。とろけるような甘い香りに、文哉はうっとりと酔い痴れた。

「ああん、匂いもだめええぇ。やん、そんなことされたら……わ、私……私いぃ」

ぶちゅぶちゅ。にぢゅぢゅ。ぶちゅぶちゅ……。

「あーーーん。見ないでぇ、恥ずかしい……恥ずかしいようう……」

（おおお、いやらしい。またアソコがひくついて……）

ほったらかしにされた媚肉がせつなげに蠕動し、新たな蜜を分泌させる。

泡立ちながら溢れ出す愛液は、さながらぎゅううっと搾られたレモン果汁のよう。甘酸っぱいアロマを立ち上らせ、魅惑の少女果実をいっそう魅惑的にする。

牝壺から滲み出した愛蜜と唾液のミックス汁がつーっと糸を引いて粘り伸び、振り子みたいに揺れた。

「ひふぅん、ああん、こんな……こんなことって……むあああぁ」

「くうぅ、美緒ちゃん、だめ。も、もう……我慢できないっ！」

疼くペニスは爆発寸前。制服ズボンの股間を亀頭の形に押し上げ、はしたない三角テントを張っている。

鼻息を荒らげて立ち上がり、ベルトを弛めるとトランクスごとずり下ろした。

ブルルルンッ！

いきり立った肉棒が勢いよく飛び出す。ぷっくりと膨らんだ暗紫色の亀頭がぬめ光っているのは、こらえきれずに漏らした先走り汁のせい。目の前の初々しい桃尻と、その下に見えるロリっ娘亀裂に反応し、ビクン、ビクンと跳ねて雄々しくしなる。

文哉はぐっと膝を落とし、あどけない秘唇にカリ首を押しつけた。

クチュ……。

「ふはっ。あん、ふ、文哉先輩ぃ……」

「い、いいの？　ほんとにいい？」
本音では、早く腰を突き出したくてたまらない。
でも相手は自分より年下の、十■歳の女の子。この期に及んでも、処女を奪うのを躊躇する賢者な――いや、小心者な文哉がいる。しかし――、
「い、いいんです！　そのまましてください……先輩に、大人にしてほしいっ！」
「あ、ああぁ、美緒ちゃんっ！」
いじらしすぎる懇願の言葉を聞いて、なけなしの賢者が、あるいはチキンな自分が一気に吹っ飛んだ。くびれた腰をガッシと掴み、荒々しい動きで腰を突き出す。
「ふはあぁ！　ああん、い、痛いっ……！」
「くうぅ⁉」
猛る怒張が、にゅるんと温かな蜜の園に飛びこんだ。
想像していた以上に、美緒の媚肉は窮屈である。ぬめぬめした膣襞の凹凸が、それ以上の侵入を阻むかのように亀頭を、棹を圧迫し、押し返した。
「い、痛い？　続けても……いい？」
「ひううっ。ひううううっ……」
立ちバックの体勢で腹の底にペニスを呑みこんだ美緒は、悲痛な呻きを漏らしつつ

も、うんうんとうなずく。
罪悪感を覚えながら、文哉はなおもそろそろと腰を進めた。
ズズッ……ぬぷぬぷっ、ズズズッ……。
「あはああぁ……」
(き、気持ちいいっ!)
狭い肉の筒が亀頭を締めつけ、傘の縁を擦りながら絞り上げてくる。甘酸っぱい恍惚感が湧き、背筋をゾクゾクと鳥肌のさざ波が駆け上がった。
「ふわっ、あはあぁ……い、痛っ、んくうぅ……」
美緒は唇を噛みしめ、大きな瞳をつむって呻く。文哉のペニスをズッポリと咥えこんだ膣から、破瓜の鮮血が溢れ出してくる。
「あ、あぁ、美緒ちゃん、ごめん……」
思わずそう謝った気持ちに誓って偽りなんてない。だが申し訳ないと思いつつも、俺は何て幸せな男なんだと、甘酸っぱい喜びに浸ってしまう。
自慢じゃないが、童貞生活十[redacted]年。今までもてたかもてなかったかと言えば、胸を張って「ノーコメントで」と言える悲しい人生。それなのにあやねに続いて美緒までなんて、自分で自分が信じられない。これも写真を始めたから開けた運命か。

（って、そうだ、カメラ……）
文哉は足元に置いたままのカメラに気づく。すると美緒が、
「謝らないで。う、嬉しい……先輩に……大人にしてもらえて……えぐっ」
鼻を啜り、声を震わせて泣きじゃくる。
「み、美緒ちゃん……」
「先輩、動いて下さい。お願い……少しでも、気持ちよくなって！」
（くぅ。可愛すぎるっ……！）
胸を締めつけられるような愛おしさにかられ、ひょいとカメラをピックアップ。素早く構え、二人の性器が結合した部分にレンズを向けると――パシャッ！
「あぁぁ⁉　や、やだやだっ！　先輩いいぃ⁉」
「誰にも見せない！　信じて……二人きりの思い出だからっ！」
文哉はなおもシャッターを切ってタブーな光景を撮影しながら、カクカクと腰を振る。狭すぎる膣洞をミチミチと押し広げ、ペニスを雄々しく抽送する。
カシャ、パシャッ！　パシャパシャ！
「ひぃぃん！　やん、やんやんっ、ああん、こんなとこ撮らないで……先輩、私恥ずかしくて死んじゃうようぅ……」

「せ、先生……いいでしょ？　見せて……見せてっ！」
息を乱してぐったりする女教師の腋の下に手をやり、湯船から立たせる。豪快に雫を飛び散らせ、湯気を上げてフラフラ立ち上がる全裸教師はほどよくふやけ、艶めいたピンク肌に紅潮していて何とも色っぽい。
「あぁん、文哉くん。んはあぁ……」
「す、座って……えっ……菜々子先生っ」
湯船の縁に座らせようとして文哉はようやく気づく。なんと――、
（ううっ⁉　先生、アソコの毛、す、すごいっ！）
力なく座る女体はどこもかしこもむちむちで、オスの目を釘付けにせずにおかない濃密な色香を振りまいていた。小玉スイカのような乳房も、細腰のキュッと締まった魅惑のくびれも、剥き立てのゆで卵みたいにつるんと張り出す臀部のボリューム感も、すべてが男を腑抜けにする魔性と癒しに充ち満ちている。
だがそれでも、少年の目と心を鷲掴みにしたのは女教師のふっくらした恥丘――そこ一面に豪快に生え茂る恥毛の繁茂であった。
（これって……い、いわゆる「剛毛」⁉　あぁぁ……）
楚々としてどこか奥ゆかしい顔立ちや仕草とはギャップのありすぎる、野性味溢れ

る密林ジャングル。お湯を吸ってしっとり濡れた漆黒の縮れ毛が絡まりあい、毛先からポタポタと糸を引いて雫を滴らせる。
「せ、先生……あぁ、すごいっ！」
「きゃっ⁉」
鼻息を荒くした文哉は「ごめんね、ごめんね！」と言いながらも、謝る言葉とは裏腹な荒々しさで菜々子の脚をお湯から上げ、勢いよく大胆なM字に広げさせる。
「ああぁん、いやあぁ……」
「うおおぉ……！」
洗い場の床に突いた手をつっかえ棒みたいにして体重を支え、されるがままはしたない大股開きになる菜々子。M字に開いたあられもない股間の眺めに、文哉はじわじわと首を締めつけられるような息苦しさにかられる。
（い、いやらしい……これが……先生のっ……）
ぐびりと生唾を飲んだ。そそけ立つようにもっさりと、漆黒の恥毛が逆三角状に生えている。縮れた黒い毛は媚肉の周囲にまで生え降りていた。
これはもう、まごうかたなき剛毛美女。息を震わせた文哉は菜々子の内ももに押しつけた指をさらに食いこませて顔を近づけ、秘処の眺めにまじまじと見入る。

「や、やだ、そんなに……見ないでえぇぇ……」
「うくうううぅ。た、たまらないっ……」
ふかしたての肉まんそのもののふっくらした大陰唇は他の肌と近い色をしている。小陰唇の妖花はすでに開花して、サーモンピンクのラビアをべろんとめくれ返らせていた。その様はまさに「欲情」という言い方がふさわしい、剥き出しの肉悦を感じさせる開き方。珊瑚色の淫核は大ぶりで、莢からずる剥けになって震えている。
「あぁ、だめ、先生……むはあぁ！」
「ひはあぁぁぁんっ……」
たまらなくなって呻きながら、咲き誇る淫らな牝花にむしゃぶりついた。強い電流が駆け抜けたのか、菜々子はひときわ取り乱したよがり声を上げ、尻を跳ねさせる。少年の鼻腔に、食べごろ果実のような濃厚な匂いがいっぱいに広がる。
「せ、先生……あぁ、エッチな汁が……こんなにいっぱい！」
フガフガと息を吐き零しつつ、舌でラビアをねろねろねぶり分け、漏れ出た愛液をすくいとる。舌先にえぐられた膣穴の窪みが喘ぐようにひくつき、コポッ、コポコポッとさらに熱い愉悦の汁を搾り出す。
「ふわっ、やん、恥ずかしい……文哉くん、先生恥ずかしいよう。あふぅぅん……」

羞恥に悶える菜々子らしい生真面目さと、ぶちゅぶちゅぶちゅちゅうっと下品な汁音を立てて後から後からはしたないよがり蜜を泡立たせる恥肉の生々しさとの落差に、文哉は女の人という生き物の不思議さと可愛らしさを感じる。

（い、いやらしすぎるよ。こんなの絶対反則だってっ……うおぉ!?）

憑かれたようにホジホジほじっているとまたも膣穴が蠕動し、熱い液体が勢いよく飛び出した。粘つく汁に顔の下半分をベチョベチョにされ、菜々子への愛おしさが猛々しい情欲となってさらに燃え上がる。

「あぁ、先生、オマ〇コいやらしい……」

「ひいぃ!?　い、いけないわ、そんな言葉使っちゃ――」

あえて下品な卑語を口にすると、思った通りうろたえて諭そうとする菜々子。

だが文哉は怯まず、恥毛の密林に指を埋め――、

「きゃああ!?」

「だって、こんなにエッチな毛がモジャモジャで。むんぅ」

と媚肉を舌であやしながら、シャンプーで泡立てるような指使いで恥毛を攪拌する。

「やん、だめ、文哉くん。そこ掻き回さないで。あぁん、引っ張っちゃイヤン！」

クイッ。クイックイッ……。

「あん、イヤン……イヤン、イヤン、あああぁ！」
指に絡みつく秘毛を優しく引っ張ると、女教師の悲鳴はいっそう切羽詰まった恥じらいを滲ませた。引っ張るたびにいやらしい縮れ毛がまっすぐ伸び、毛穴が三角錐みたいに盛り上がる。
もっとエッチなことがしてみたくなった文哉は恥丘から陰唇の左右に指を移し、縦の亀裂を彩る毛を指に絡みつけて、クイッ、クイッ、クイッ……。
「ひいいぃんっ！　やん、だめぇぇ！　そんな毛、引っ張ったらあぁぁ……!?」
ぶちゅぶちゅ……ぶちゅぶちゅぶちゅぶちゅうぅぅ……。
「おおおぉ！　あぁ、先生、オマ〇コすごくヒクヒクいって……」
「そ、そんなこと言わないで……やん、引っ張っちゃやだあぁ、んふぅわあぁぁ」
メチャメチャ大量にマ〇コ汁が出てきたよと言いたかったけれど、生唾を飲んでしまったせいで後の言葉が続かない。
大陰唇は実は相当敏感な性感帯なのだと、どこかで誰かに聞いた。秘処を縁取る毛を引っ張ると性感を刺激されるのか、それまで以上のひくつきぶりで、女教師は甘酸っぱい匂いの粘液をドロドロ、ドロドロドロッとお漏らしする。
「せ、先生……愛液が白くなってきたよ。これって……たしか……」

発情の本気度が上がると愛のオイルもいっそう粘りを増し、白い濁りを混じらせだすはずだった。むんっと鼻の奥にまでくる媚臭もいっそう濃密さを増している。
「い、いやん……あぁん、文哉くん、せんせい……あふぅわぁ、せんせい――」
恥じらいながらもしとどに愛液を分泌させ、半開きの朱唇から熱い吐息を零して菜々子は喘ぐ。その美しく官能的な表情に、少年は激しい昂りを覚えた。
「な、菜々子先生っ！」
「――――きゃっ!?」
まがまがしい欲望が、怒りを露わにした仁王さながらの猛々しさで膨れ上がり、文哉の身と心を紅蓮に染めた。女教師の細い足首を掴んで足の裏を天に向けるように抱え上げると、菜々子はカクッと肘を折り、洗い場に仰臥する。マスクメロンのようなおっぱいが自らの重みに負けて平たくひしゃげ、痼り勃つ乳首を円を描いて揺らす。
「あはあぁん、いやあぁ……」
「先生……ぼ、僕……もう我慢できないよう。ねえ、いい？　挿れてもいい？」
尻まで浮くほど豪快に片脚を抱え上げたまま、蹲踞の姿勢に腰を落とした。
腹にくっつきそうなほど勃起したペニスを掴んで角度を変え、ラビアを掻き分けて牝穴に押しつけると、菜々子は「アハァン」と背筋を仰け反らせる。

「先生、もうダメ……挿れていいでしょ？　ここに……ここにっ！」
再び足首を両方掴み、股裂きにも思えるほど左右に開く恥ずかしいポーズにさせる。いやがって暴れる女教師の足首を拘束したままそろそろと腰を前後に振り、亀頭の先をかぽっと媚肉に包みこませる。
（あああ、と、とうとう俺っ――――――――）
「ひはあぁぁん、ああん、文哉くん……あっあっ、あああぁ……」
「くおおぉ、先生……あぁ、たまんないっ……！」
一息に腰を押し出したい気持ちをこらえ、しゃくる動きでわずかに腰をくねらせる。亀頭の先っぽを包んでまん丸に広がった膣穴が文哉の動きに合わせ、さらに開いたり閉じたりしながら鈴口をぬるぬると締めつける。
夢の中でおしっこを我慢しているようなムズムズ感が股間から全身に広がり、口の中いっぱいに、苺を噛みしめたような甘酸っぱさが広がった。
「ひいぃ、文哉くんっ……あっあっ、やだっ……あっあっあっ……」
文哉も相当な気持ちよさだけれど、成熟しきった女体にも強い恍惚電流が弾けるのだろう。菜々子はいつものおっとりした姿とは別人のようにかぶりを振り、むちむち裸身をくねらせてヒップをもじつかせる。

アップにまとめていた髪がくるりとほどけ、扇みたいに床に広がった。
「い、挿れてもいい？　ねえ、先生……挿れたいよう。んおおぉ……」
ブチュッとカウパーを膣の入口に漏らしつつ、なおも文哉は甘えてせがむ。何とした
ても、菜々子にエッチなおねだりをしてほしかった。
「あぁん、文哉くううぅんっ……」
（おおぉ、菜々子先生っ！）
ひときわ強く媚肉が亀頭を締めつけた。染みるような快感が股間から四肢に弾け、
欲求不満のさざ波が背筋を駆け上がる。
「挿れてほしい、先生？　僕のちんちん、どこに挿れてほしい？　言って……」
「いやん、恥ずかしい。先生そんなこと……」
「言ってってばあぁぁ……！」
駄々っ子になって、さらにちょっとだけ腰を進める。
「ひはあぁぁっ！」
にゅるん――今度は肉傘の一番出っ張った部分まで、ぬめる媚肉に包まれた。強い
酸味の錯覚で身体が痺れる。女教師の内ももに、粟粒みたいな鳥肌が立った。
「あああん、文哉くん、そ、それ……それえええぇ。あああアアァァっ……」

カリ首を咥えこんだ媚肉がヒクン、ヒクンと収縮して強い力で締めつける。甘蜜に溢れた媚肉襞に吸いつかれ、疼くような快美感がミミズみたいにのたくる。

菜々子の声もいっそう取り乱した艶を帯び、振りたくる美貌には、はしたない官能にとろけかける情欲がこみ上げた。

「言って、先生。ちんちん、オマ〇コに挿れてって。お願いいいいいいっ！」

そっと腰を突き出し、亀頭が丸ごと埋まるほどペニスを進める。でもそれも一秒にも満たないわずかのこと。すぐに腰を引いて先端まで牝肉から抜き、また亀頭だけをヌチュ。抜いたらまた、亀頭だけをブチュ。ぐぢゅ、ぶぢゅ。ねちょ、ぢゅ。

「ひおおおん。あぁん、だめ、我慢できない……ちんちん、そんなエッチに動かされたら……ひおおおおんっ！」

とうとう菜々子が、溜めこんでいたものを爆発させた。

髪を振り乱して裸身をのたうたせ、両手の爪でガリガリと床を掻き毟って、しゃくる動きで亀頭に股間を擦りつけてくる。

さらに深いところまでペニスが埋まりそうになり、文哉は慌てて腰を引いた。

「おおおぉ、せ、先生いぃ……」

「い、挿れて！　文哉くんちんちん挿れてえぇぇ！　先生のオマ〇コに！　オマ〇コ

にいっぱいちんちん挿れてええぇ！　もうだめえええぇっ！」
「ううぅ、な、菜々子先生いいぃ！」
死ぬほど聞きたかったふしだらな言葉を聞いて火を噴くような激情に貫かれた。
女教師のむちむち美脚を股裂きV字にしたまま改めて両脚を踏んばり、荒々しく腰を突き出して――ぬぢゅ……ぬぢゅぬぢゅぬぷぷぷっ！
（うわっ、うわっ、わっわっ……あああぁぁ！）
「おおおおんっ！　ああぁん、入った……入ったのおおぉ！　ああん、すごいの……すごいいぃぃんんっ……ふおおおぉぉ！」
「あ、あああぁ、先生も……す、凄いっ……くううぅ……」
思春期の少年を襲うのは、嬉しすぎてシュワシュワと蒸発してしまいそうなほどの感激と、菌を食いしばって耐えるしかない気持ちよさ。首筋が引きつるのを感じながら天を仰ぎ、括約筋を窄めて射精の誘惑に抗う。
（な、何このオマ〇コ……嘘だろ……え、えええぇ!?）
信じられない思いで、ペニスを包みこむ媚肉の快感に酩酊する文哉。
少女と大人の女の「違い」とは、人間的な成長による気持ちや考え方の深みの差とか、柔らかな肉づきがいっそう艶を増す見かけの成熟度とかだけではなかったのだ。

（あぁぁ、オマ〇コ……とろとろだあぁぁ！）

菜々子の蜜穴は奥の奥までたっぷりすぎる愛液を分泌させ、とろけきった味わいで文哉の怒張を丸呑みした。

初めてということもあったのかも知れないけれど、少女たちの膣はほぐれきらないこわばりで文哉を恍惚とさせた。一方美しい女教師の膣は、しばらく肉壁の場所も定かではないほど溶けまくり、しかも驚くほど窮屈でほどよいぬくみに満ちている。

まるで煮こんだトマト果肉にぷすりと肉棒を突き立て、溢れ出す果肉のとろみと粒々に亀頭から根元まで満遍なく揉みほぐされている心地だ。

「あぁぁ、先生……幸せだ。僕、幸せだよう！」

あまり長く持ちそうはなかったが、少しでも長い時間、愛しいこの人とセックスの悦びに溺れたかった。下唇を噛みしめ、細い足首を握る指に力をこめて、カクカクと前後に腰を振り始める。

「あぁぁぁぁん、文哉くううん！　あぁん、は、恥ずかしい……おおおおんっ！」

「おおぉ、な、菜々子、先生……すごい声……あぁぁぁ……」

別人のような声を上げて恥悦を露わにする菜々子の姿に、文哉もいっそう盛り上がり、ジンジンとペニスを疼かせてぬめり肉の中で抜き差しを繰り返す。

菜々子の媚肉はただ窮屈でとろとろなだけではなかった。不随意に蠕動し、さらに強い締めつけで文哉の怒張を甘やかに包み、解放し、再びムギュムギュと包みこむ。
（ええっ！　こ、これって……何なのっ⁉）
「せ、先生……あぁぁ、先生のオマ〇コ、生き物みたいに動いて、僕のちんちんを絞り上げてくる……おおぉ……」
空恐ろしいほどの気持ちよさに恍惚としつつも、声を上ずらせて訴えた。まるで無数の小さな舌がペロペロねろねろとペニスを舐めながら呼吸でもするように締めつけと弛緩を繰り返す心地。これは「大人だから」というのとも多分違う――。
「あぁん、か、勝手に……勝手に動いちゃうの……！　おちんちん擦りつけられると……ふおおん、勝手に……ひはあああぁっ！」
（も、もしかして……ミミズ、千匹とかって奴⁉　まさかそんな……）
悩ましげなピンク色に茹だりきった女教師のよがり声を聞きつつ、耳学問で聞きかじっていたエッチな知識を総動員して辿り着いた仮説がそれ。
もしもそうだとしたら、たしか数千人に一人とか何とかいう「名器」だった気が。この世で一番愛しい、こんな美しい人がミミズ千匹名器だなんて、
（し、し……幸せすぎるだろおおおっ！）

文哉は天にも昇る多幸感に舞い上がり、この悦びを菜々子にぶつけ、分かちあいながら、もっともっと気持ちよくなりたくなる。
「おおぉ、先生……先生も気持ちいい？　オマ〇コ掻き回されて感じちゃう？」
「おおおう、そんなこと聞いちゃいやん……あぁぁん、文哉くん、ふおおおうっ！」
（先生、すごく興奮してきた……あぁぁ、ゾクゾクするっ！）
密林剛毛を晒しながら恥も外聞もない大股開きになり、淫らな生殖の快感に耽溺する女教師に、愛情いっぱいの嗜虐心が鋭角的な尖りを増す。
「言わないと宿題しない。先生、オマ〇コ気持ちいい？　お願いいぃ！」
しゃくる動きで腰を振り、ヌチョヌチョと亀頭を膣襞に擦りつけながら煽った。ぬめぬめした襞の凹凸をカリ首が擦過するたび、しぶくような快美感が閃く。
ガクリと腰が砕けそうになり、文哉は何度も踏ん張り直す。
「ああん、文哉くうぅん！　どうしよう……教師なのに……私教師なのにいぃ！」
乱れた濡れ髪を振り乱して菜々子が叫んだ。その反応を目の当たりにして、陥落の時は近いと息詰まる思いで確信する。
「言って……先生、言って！　オマ〇コ気持ちいい？　菜々子先生いいぃ！」
「ふはあぁ、き、気持ちいい！　オマ〇コ気持ちいい！　気持ちいいのおお！」

（あああ、先生っ！）
菜々子ははしたない言葉を迸らせ、薄桃色に艶めく裸身をせつなげに悶えさせる。文哉は洗い場のすべりを利用して女教師を押しやりながら湯船を出ると、ぬめる女体に覆い被さった。もっちりした膝裏に手を潜らせ、今度はM字に開かせる。
「あはああぁん、ふ、文哉くうぅぅんっ！　先生……か、感じちゃうンン！」
「菜々子先生、ぼ、僕も……すごく気持ちいいのっ……とろけちゃう！」
愛する年上の人の身体を二つ折りにして、打ち下ろす動きで抽送する。
「ああああぁ！　ああああああぁ！」
柔らかな肉鞠になった菜々子は上へ下へと桃尻をバウンドさせ、あだっぽい声に狂騒の艶を乗せてよがり乱れる。
「ふおおぉぅん、あぁん、文哉くん。すごいの……先生困る……困るうぅぅ！」
身体を棒みたいにまっすぐに伸ばし、反動をつけてズンズンと肉杭を華苑に穿つ。
菜々子はそのたび尻はおろか、背中の半分ほどまで浮き上がらせ、「ああん、あああんっ！」と甘い媚声を零して文哉と一緒に跳ね踊る。
「先生、久しぶりなの？　エッチするの、久しぶり？　あぁ、気持ちいい……」
猛る肉スリコギで菜々子の膣穴をグリグリネチョネチョとほじくりながら、言葉の

責めスリコギでも羞恥と理性をグチョグチョと掻き回す。
「あぁぁん、ひ、久しぶりよ……久しぶりなのおぉぉ！　あぁん、文哉くん、私も気持ちいい！　高校生なのに……高校生の男の子のちんちんなのにいいいぃぃ！」
「ち、違うよ……恋人だもん！　僕先生の……恋人だよおぉぉ」
じわじわ膨張する射精願望にうっすらと意識を濁らせ、ピンク色の霧の中をふわふわとたゆたう。女の人を大切に思い、愛しさに胸を締めつけられる感情は、滾るような肉の渇望と背中合わせなのだと思い知らされる。
「先生、好き！　大好きっ！　もう放さない……あぁぁ、射精するっ！」
どんなに括約筋を窄めても、もう限界だった。目の裏で白い光が瞬き、耳の奥で潮騒みたいなノイズが高まりだす。
「んはあぁぁん、あぁ、文哉くん……可愛いわ！　可愛いの！　気持ちいい！　先生も……あっあっあっ……もうイッちゃうぅンンンッ！」
汗ばんだ熱っぽい腕で教え子の背中を掻き抱き、理性を散り散りにさせた黄色い声で菜々子が叫ぶ。高々と抱え上げていた女教師の両脚を解放した少年は、まろやかな裸体を抱きしめてカクカクと腰を振った。
「あぁぁ。あぁぁぁぁ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/